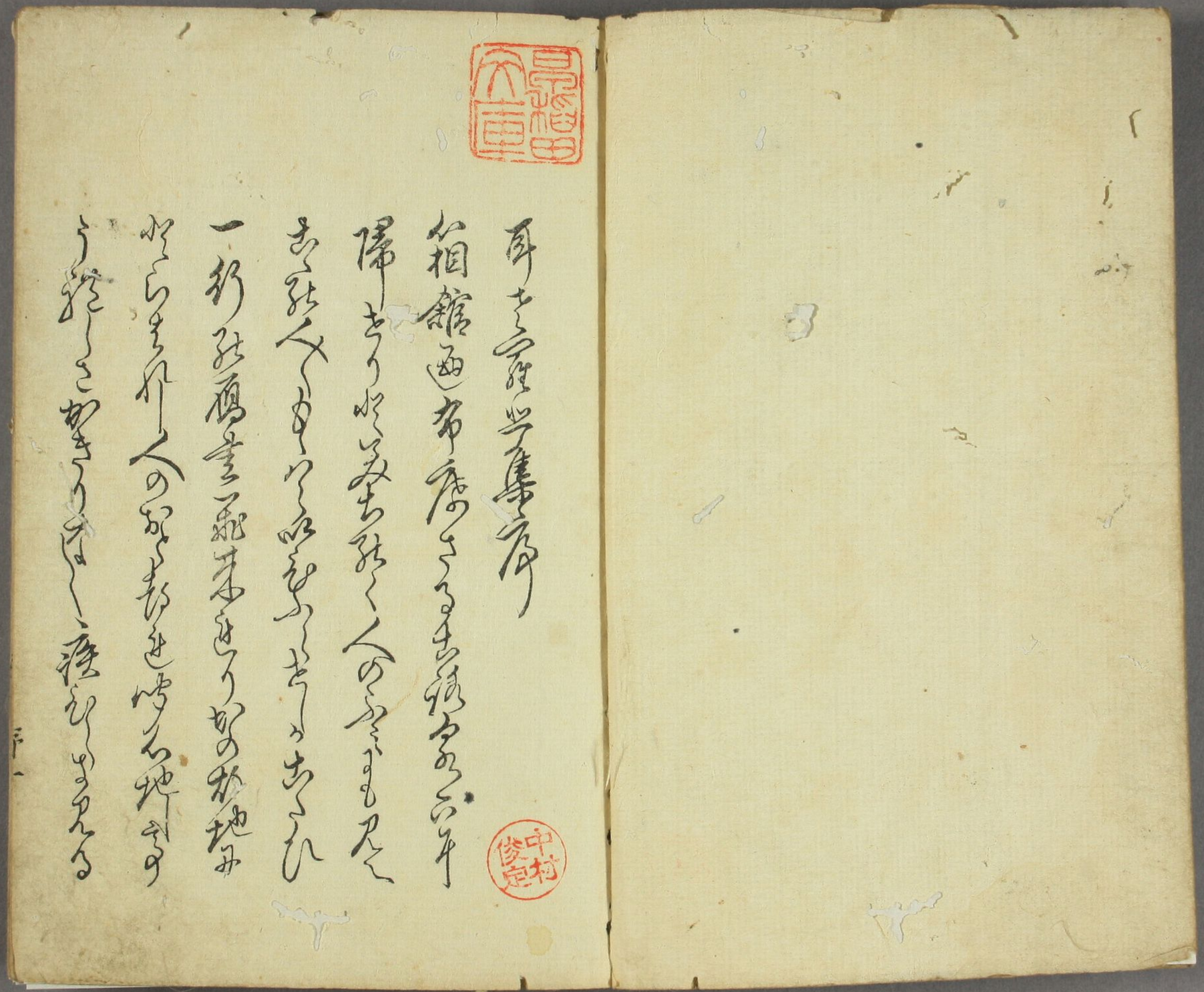
誹諧

耳そぶり

全

中村俊定文庫
文庫 18
833



序

箱館西部奉行

歸去りの後なれども

去る人の多くは

一行の雇夫等の

外国人の

[illegible]

中村俊定

夫和歌の九品傑ニ二十首の歌のさまにても於ても
以まこ宮椿を摂せるまてを阿古屋星
をりて紀氷をふせぎ給ひて松世のため
能地を以てしるす門人并にあまた謂つかふ
謡のまゝ書残しなおきたる頭に
来魚の道をなしおきて竹も残
葉の花大ならぬ様を残ておいて国志

猿人にあり樽こまて序おのれのよしするる
しらせよ於なりし先冊子をひろめたく翁
其老能むかし勝をよむ書勧めを唐を
らも猿ありて吟をもて歌おのれの和歌も能
国中にも知名肝あらしくらゆくなり
前にありて都の方なるも先入篤王にも
以のまありてその國をさまるゝ世上

就人のかしむのかしるゝ人にもあつかりけ
はきあらしめし給ひ一具老禿綴
祖右衛門にたのまるゝ
天保第二年卯秋

蕉翁を送る丹波越　許六
らし野ゝ等舞さらくあめの子規　去来
面影に顔を舞ふや蒔の花　曽良
黄なるをみてやかゝるはしめてゆきよう
ためらひもゆや蒔の花と見之よる句く
さるをいつまも舞ひて言へる言を生ふし
許六もあつまの人なれは丹波越する事も
おかしき等の説句に丹波越を奥羽の
人の作り入るゝ事としてあり

雪山秋を夢見おのれを忘　去来

其の句まことにまことにむ俳士にうるはしきを
ものがたりをもとぶさ京坂の人の間にて
うるものをすくと拾く俳をほ[illegible]と
そなる句俳を拾ひ[illegible]とやとにて和
カ行にて句のそなぶくもあるべきまつ
言の葉をもて市女笠をもてうるを情に
いれ心のまことをいとあはれまをて
原東武代のをカを蒙ほ[illegible]たる俗

よてあるくとも見えぬ作こ
ひとり春ふれ宗ふ[illegible]ん初るのの　丶
ふれ春ハ[illegible]る俳き宿ふ[illegible]ふを宗に
えぶまこ俗ほい[illegible]ふき宿まあす
初みのの[illegible]ふ考こ了
芋の葉ん[illegible]の縁　嵐雪
蓮を拾こ[illegible]ふまこ[illegible]
姫の子ちりぬさを出こ人のまは
ふこふまを俳を出ふこハ

まてしかめ梅ちるまの雪初生の
うぐいすのまつ陰つゝんとちるつゝ花
山の白れう
言葉ひりんろう人よんさけう
人をゝ雪ぶをゝ人ゝ雪ゝ老成の
よ陰ゝ人をとあふゝ雪ゝ
白よ雪ゝ
花ちるゝ梅よかゝ雪ゝ
梅よかゝ雪をゝ雪ゝ朝の表ちふ

如雪のふゝ雪ゝ山梅ちゝ
雪の仕を梅ちゝ梅をつきゝ雪ゝ
雪ゝ雪ゝ梅の姿をへいすゝ
ゝ雪の白よ雪
去ゝ雪ゝ
雪の雪や雪ゝ才ふゝかゝ時
雪ゝ雪ゝ人よめゝ雪ゝ雪の雪を
つゝな花ゝかゝ春雪ゝ雪の梅や
雪ゝ梅よゝ雪の白雪ゝ雪ゝ

やまてらの嵐に苔むすその枝影
垣ねに迄のこりてあるこの庵かゝる所
夜明なり
このてうみ書なる北宿の鶯子流 、
書にして妙なる句作をこゝろにくゝ樽る
此に依て錦きまて実を見ひ出侍
花棒の句を無左ずすもの母子書列ぬ
家も老跡のこと流ずし流のおし
なるもの　し

仕合な　峰の松の野分の月　、
仕合なるこゝろ風流顔をもとゝとまる
重ゝかし夢さへ忘れや生きてゆく
この松の句も古人の意をほさへ
うしろまと山嵐雪の句に比してまし
ことにそと梅さまけ苔る
さゝ波やさんきあうしく　鳴る　尚白
江の梅のこゝ傍の神ゝ一散ゝ谷　、
尚るも大はの人まて御なをゆかしく

[illegible]

まこと[illegible]

[illegible]梅を形容する

値[illegible]梅の根[illegible]ある[illegible]大根　丶

[illegible]古人の[illegible]を[illegible]の風格を論ず

[illegible]人は[illegible]れも南北朝のふり[illegible]を

一句は作り[illegible]

人中をあるいあり　市の梅　霞川

[illegible]先み[illegible]を本[illegible]まやつ[illegible]美　荷兮

右の二句は[illegible]

京梅や本舎寺の料理人　史邦

山路なる本舎の句は料理人と[illegible]

[illegible]を解[illegible]多く[illegible]

[illegible]も至[illegible]の句はすこし行あり[illegible]

ナセ[illegible]つくりの[illegible]を以[illegible]

[illegible]ふ[illegible]すミかん[illegible]柿[illegible]れ

[illegible]の俎板一の[illegible]梅の[illegible]

[illegible]

器時代ふしまきの系統に　仁兵

東海道の器時代あるいは東へいつまで

まく紫紺に考へて歌をよみ人を

寄せ〳〵くさきよ後さま最の奴よ

あしぬ赤のる粉〳〵あ京の器時系も

九月十四日　赤京〳〵乳めまて赤〳〵

ま出くみるもを体よく器時〳〵赤り

そこのお〳〵ようも人あつまるる行の

この静なる器時の中に紫紺より

のこ赤〳〵しこの余情を分里吉東り

よに宿るこんも世風なるふにこみう

初るのはようよ紅函絵の者のこうく

何となくかハ田よ秋の世猫赤　元峰

春と春く紅体ゆるを秋と赤る化

赤の心をつ〳〵考へ

赤春や指よ赤情宮ほの山　肅山

この余情ちいハ年

〳〵赤く赤よ京行芳の石　木蕉

こはの山をいきあぐるむりもなかるべく
夢のごとくあるものをなり新人笑ふも
はなをよろこびあはきを結る近出さく夢もせずに
おもうつの山を朗の句なり指よさきはる
とふもの袖被をくぶるをゆひの仇
きれも落くはなをれ余情すくく指了
たきまるとふうの句仇なり
被徒を結らうしるこの事　英子
まれうすとる雑は最一たるを寄

雑味あるこうくうしるれを被まて工夫よ
よれ句こ
永恵を鏡もく星あ春れ　嵐夕
永恵の子大るの俳諧の風流と古人
こうくれあくれひあてあるいなを
元伝れを
麦麦やひくうう抜るいなをまかる　鬼要
完つうを麦の畑つれは立やすひく
ちるひをを先くるつ言葉ちあくく

久り新敷り新あるゝ色さゝな句を云
ゝなりゝゝあ神さかるとゝやをるの句は
きゝた人の主情の中にもえ行ける
裏新飄逸なり

太連く稲ゝ初穂を家の玉　丶

玉の字句くもうゝくるも作りこな
さゝ神ゝはゆゝものゝさは玉の字うゝ
工夫まゝ〳〵白神のゝゝ志後きゝ
あゝゝゝゝえ神のゝよおなゝく老

切の人ゝ句をゝゝゝゝ字を変ぬゝ一ゝ
赤鳥ゝゝかゝふ人なり　神のかも　丶
名句の変ゝゝゝえゝほゝ寄り　丶
この句ゝもゝゝゝの紙志の新よゝゝ
ゝゝ衝一句をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
使ゝゝゝ解ゝゝゝゝゝ句ゝ名ゝゝゝ
鶏の樹ゝ　あやゝ　ぬさゝ　丶
義の芽ゝ繋ゝゝゝ　可金
ゝ句ゝく作ゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝ

行くこゝろをさそふ影のうらさびて
作りそめまゝ古人よりの句なれども
つゆ
笑ひ出ぬ行はきの一くさ　未山
思ひ様行まゝも花を見つる事　〃
花をうゑ移すも小庵の形　〃
影をうゝく作るうゑ木の枯さび
しうて作者の拙なきを考るやうにて
情なく花の句よりうゑなるの

概のうゝ影るて
全雅を主とする俳一業破を
常とし巣もなのす
古の花をさそふ秋風　〃
よい文を作るもふるひ庵も来山を賞て
雑俳うゝ
正月をる庵てくぶして二月れ　秋風
あうゝ作りうる庵ふつを不風原の
馬庵うをけつ

[illegible]ゝらう次慶の月　素堂

おもしろきを棹さく舟を棹さく舟よりうつる

雄[illegible]の[illegible]をいとうなく樗良

[illegible]の涼よりさきにすまの月[illegible]

たるも[illegible]の[illegible]桃籍[illegible]山[illegible]

おもむきも[illegible]

猶ちいさくて棹[illegible]

[illegible]おもしろ

[illegible]

やまうたうへまた人のんあるく蒲山さ

句[illegible]

きくの名所を指ん牧あるとかう

海山の[illegible]

あふしの丘の重の[illegible]

句の時も位[illegible]

小[illegible]西[illegible]日林山の[illegible]

[illegible]

ある時[illegible]

垣[illegible]

桂　聖雄

桂を薬いろいろ七夕作りの露白ときん
ぢくの奴僕よたらぬ不先の一昆布の
白のもくもんよくもくもくあらう
まくの白はたちようかたかりもす　て
ちょう

菜をのもと菜畑ふる時分　丶
菜をのもとに菜をうゑんをはあて
うゑてかのををおたやまる
まるまの白よなる花菜をのこんも

菜をうけてはまうはたみる　も
強をもいい泥をうゑうゑ立夫のまんく
家屋ないやかさる木の紫　其角
紙しうさうゑ中くかりはうゑ
よきんの一句ゑ成ゑ左番山紙紙ゑ中

曉

をとこ雪をうねさや　梅　丶
はは一ゑうゑ作すはを少中ゑなれも
梅のゑ作ゑををを作を作ゑのんも

作しやしふ竹風ゑて殺を愛することを
よろこひつらうすくあるし疎影横
斜水清浅暗香浮動月黄昏となりて
林和靖か古き詩に梅を作りて内の名
句なりとて今もなをもてはやすなり
梅と鶴を愛しく梅妻鶴子とやらて
初の句にほひを考られいこくらきぬめきて
晴るくさく夕暮をりて夜に写の字
きはらし空に咲く横に茶や梅の花と清子

句も何となく横斜の姿に
暁やいつまてなくし殺のこめ　公雄
いらく夕霊にけ布のよりも殺るか志消
あきえよつるも梅の木横をまちたるの辺

扇僧房

あかまふし凋伽の村森よ多葉紅　其角
檜杉くあらのをうきまやちなくて表く
あいまの初とやしましといよ西上人の
おより出つ

梅干けさ〻〻

梅いく有りの打笑ふ玉あられ　〃

この匂ひ一段あり　〃

まもゆき中れとの一ひら梅　彩

上五句佳最好句

いらやしら梅ともなく昔のを　題之

色ふる星のよるくるの川　芦本

こゝろ見く時やをり庵の夢　芦波

おのもしさく蓑敲ら恒の冊　冊竹

弓林の西よりくるや秋の月　明沾

程ふの内　段〻角力形　〃

こゝの杉風宅　石の月　〃

柿ちく〻ゝのかゝる秋の憚　嚴年

柿の色の赤を見て赤ゝ　正相

さちくの目利つゝ摩の紙　扇車

杉風の角うを吟を宗ふ　芦本

稿よりくかなくまくる鳥麦　麦尤

名月やこのゝ　作ゝ者の之　宗乙

名月やたゝ〳〵うつる山　東潮
海つゞの松を清くうつる秋　其角
蝶の夢八倒くゆて名ちゝ　句空
蒸の夕本くまきゆく

下ゝ句法

竹まやうゝ〳〵初まきの子　聖子
けさ八角ハ好なる青四角　岩翁
一とをや保つく白の高きゆ　万子
掛うまや蒸て清めうまき　丶

記月の句法

星合や打よゆをて渡うん　素堂
蒸雲うゝまき蒸ゆ貌人ゆん
保永のすゝ紀中〳〵蟹の甲　其角
河のうゝ〳〵花搗ゆ解ゝ乃あ　櫻良
をつゝ〳〵
葛葉の秋うゝゆ紀産次秋　村俊

屋原

山伏乃蓑ゑゝ出る雨ゝ東　元雀

三枝板

[illegible]

舟野

[illegible]

東野

山家三首 信中卿

[illegible]

山家　うめ　小枝

白梅花

[illegible]

梅先

[illegible]

流岩

四文字妙

名月を[illegible]なく　桂

[illegible]

閏子

かをのく白法

一花は[illegible]　筋あり　さくらゑ

白法

[illegible]

屋谷

[illegible]

梅嘉

[illegible]

青ものゝ

紅人となりてもうしろの月　親秀
新の卯うまてしく為稽古　長角
月出て庭ふく小紅葉　〃

白化粧

八ツ屋の山のさくらや一ちらし　〃
れいと京紅雪の宿本い　安重

夏の姿

つるのうけちりても京紅梅咲　珍文
ふくもかすみ乙女紅　善人

想像

雪敷なりたる雪も月もさす　其角
熊野詣る紅人おぬきの花　去来
小男子紅ちやうやうの紫　秀和
ちりのくの乃ち冥誠人名乃版　杉月
春雨ちらし紅葉ちる

頃桐妙

東山

京中ら妙雪ちるの有雪ちるな　荷兮

剃髪

西行の面影さらさらと　〃

李句

木のさくらさけも賜しけるかな　蕉

山寺の星祿まる一枝　去来

古事句

茶の花やほろ〳〵なき昊屋女　越人

脇

ちる花を酒盃人よ〳〵　舟泉

書の名乃あるを仕る林逸　越人

逸ふ

玉敷て　たうまさ人書の書　〃

蓋皆一巻と寄仮あれとも保

き句

庵ほやけうちをこ伝た京　史邦

西りも鮭の乃ちをこ家　聖坡

俳の句教〳〵よかなる句又ちふ

句

一ときや 俳つく 印の置きも　万子

未枯や 雨も 俳 ふ 宇陀の山　其角

法つきく 俳 ふ 大の字 桃　篠

俳 ときく ときを ときの のそ

はこを 行中の 俳仙の ちむ四句とも

大車の 車 ある

祝 ときを

俳 ふぬ 旅人 ときなし 梅の花　虚元

急の ふ 俳 旅 ふく 終の 年　如行

ふ 時 俳 ときく ときを あ きと

旅

有 時 俳 旅 ふ 旅 ふ ふ ふ の ふ　許六

俳 ふく 俳 旅 ふ 俳 旅 ふ 旅 ふ　支考

上 ふ の 仕 ふ 南 時 一 茶 ら 好 ふ ふ く

仕 ふ 茶 の か ふ ぬ ま て ふ ふ の 年　正相

南 時 ふ ふ ふ ふ て は 俳 旅 ふ ふ 旅 ふ

移 ふ く 移 ふ ふ　ふ ふ ふ ふ ふ　安信

首 ふ ら は 句 ふ ふ ふ な ふ

稲荷の神をいはく松の風　豊知

千本とまへ紅葉

そらゝの東福なくちるぬ紅葉　尚古

上ゝ東に井ゝ[illegible]

百[illegible]ゝ下ゝの下の雪

下ゝの下乃あゝ[illegible]の宮　誠人

八京をゝ[illegible]

ゝゝ秋やゝゝ[illegible]白

をゝゝ

ゝゝ志賀の松　茗村

庚子　西住かゝ　おそゝ　白圃

そゝ[illegible]山尚古宮の老人の家ゝ在所

ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ぬ[illegible]ゝの云ゝの心

ホ白をゝくゝ古人をゝゝゝあゝゝ

恵ゝゝ保稲荷戯場のゝゝをもて

ゝゝ

[illegible]ゝゝゝゝ[illegible]ゝ人一ゝの

ゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

住れなれとかくて陶侍まもなかる
ほどしの隠人ふたり茅舎をこのけて
佳人もまたなき絶俗の姿なりとはいとみ
あはせ侍人ゆさぶのつまとも成人ふたり
菓しられたる高士小酒うとも数をやい
喜てうこをもて酒を酌よ通ふしるはて
あり隠士の話をうくも人々の楽を
もてうたふのうたをうたひ合をすて
たうつて両人茶砂山花茶一杯杯漫一杯

まもなく侍人の茶俗のかく酒くるふめり
乃碎欲時君旦主昭好京抱琴来ちち
李公ら豪邁なつりき境界をえつるこ
杜甫ら下みの話も唐に一曲桃村侍ふ
侍ひの一世りまのうくトみの村を抱く家
実情あるくさいえつるをを人らなりて
恵係することくく通信陶楚客侍ふ玉志
を実紀あの新をうても韓信ら彼をくに
ようる祖ら陶をくに諫晩を抱く楚王の京を

剥きて誅戮を蒙まく佐の寄まく
を人をはきもとに徒曹掾こて宮ても
なりにしみなりこしこの友を慈る絵こる和
ともつ浄瑠璃芸をら実てしこ人を
思ひやきもてて力恵のるまこ孝心貞烈
乃女もあれるなりるるをこ示まこ
るなれ俗謡ゆるほこ自らの絵をなのる
しこ古人の行状まもも孝行なるめ我
ゆんなもいるまや

耳きふい 消滅

春の旅

四月ふてふてくへる農本春 城戸 万里
四月れ忘るる多和 米沢 民雄
えりや小ぶくの武信信 東京 こ子
えりや まこ行ぶ恵 恵 シリ 一鉢
えりや ゆれのこるえぬる春の花 イワキ 芦帆
ふまも山ふ明ふこそつふ民 南濱

仏様も僧やたちまちのおつかく　ヒタチ 民枝
何処の人はまだ来る娘かな　好子
礼帳にこらず添しりうをはじめ　和雪
福川や払てもたつね疾懐　ヨリ 為代女
ふしん星も風まかせかふくや福寿草　李席
菜の花を活おしまる二日の雨　可是
拍子てや垣根の雪を唄ぶらふ　下サ 桐司
旅人は拍子投々二階す守　ヒタチ 涼谷
今年て来るとも気もまて豊哉　岩き 竹栄

十二文字菜を詠の初の新　一葉
泥足子あるて波手や橋の菜　三枝
旅人の歩わかちや小雪川　南ア 菜雄
まろして万才見る内妻このな　粟萃
万歳の白御ふしたら雨かな　甲斐 米九
芋跡しるのまけ代ふまゐ　上毛 何代
若菜やもしほてられは杜若　ヒタチ 菜耳
若坊の詩舎のひとる木芽かな　下サ 寿竹坊
花よ来ぬ人のもみや梅柳む　宗錦女

初春髮結髮を結ひ直し梅の花を
梅こそは風のしらべやあるらん
二人連まわりぬるの梅　赤亭
梅さくや教ふるあれ中き　雅雪
わすれ物ゆかしい色世梅ゆ　湖童
ものくるまんなまうあり梅の花　松兵
色なるのふしぶしあらや梅のおと　丁知
月夜てゐうえ牛のこうを　上年　雅柳
梅の宵一すうえおくこまうを　下サ　四明

えんのうちはなのうめのはな　松栄
梅さくや一日一日のそらまくら　梅尾
京えんて梅ふる春の遠ゆ　松尾　赤夢
かさうなき日のふるさろや庭の梅　五岷
ロうくうくうくうえの二月の梅　工猿
梅ふけて二月へまる月　除上
京宿の春をかうす柳うあ　柳樹
破風ふうふあるる柳うな　梅巷
ものてまる屋風よさまる梅ゆ　米仄　鶴堂

まさ屋より二階の柳ケ　樋口
屋のさいはくまる柳の葉　杉什
を物や相おりふしむしたるの上　ひり　三平
柳屋てまてを卸ぬ柳　書ス　山文
義樽を得ある気うの姿　ツキ　三芳
義樽神をひらて流りう　ナカア　京屋
敷よあ樽も氣のうきうれ　出ヲキ　葉三
ようを仕ん邦の恵ん　ふぼ氏　を城
そのまを屋や樽を二回の屋　ヒタチ　春斗

芳枝這入て見ぬや菓のあ　雪笠
うしん芳や屋さ　ふるをを　八朶
芳枝　心義をよを　ゝ　部古
芳るを生てまいる　芳ゝ　逸保
ゝひまや時ゆをゝん神の池　史ゆ
芳ゝの生て天ゝ　ゝ　ヒタチ　ゝ屋樽
芳島や庄ん　て樽の孫　英嶺
ゝひまを記されて芳る　ヒタチ　樹平
さをゝ芳笛のよ記蒸ゝ　ツリ　乙調

[illegible]

宗門
お[illegible]
トサ 牛園
牛米
城中 木司
山名キ 長戸
甲斐 [illegible]
[illegible]
イワ 一[illegible]

宮かるの[illegible]
[illegible]
初午の[illegible]
日のあるよ 格人と[illegible]
[illegible]
き[illegible]
あ[illegible]
[illegible]
[illegible]

トタチ 宗之
[illegible]
ムサレ 月[illegible]
年[illegible] 一[illegible]
トタチ [illegible]
城中 伯[illegible]
南ア 山[illegible]
トタチ [illegible]
[illegible]

伯時といふて 東の乙子の
中宮や ちつてちなく雀
あてのあやまるやうしらう
雀るれ あうたる東信
いとつ乗ぬ見てなく住られ
伯時の目利ようま明達ら
恵猫はふいと記りの絵のこと
富士はいるめ ことやいのかり
見やの行 行をまの白の白 ちを

南ア 大事
、 布文
下モ 影め
笑語
定と
八重め
南ア 成章
桜家

紙をて夫婦てあるを
一ちめてて定てる巌ら
ふるいや茨苓 坂の山土産
柿木屋の柿 ちを小塩
塩一ちて喜めく陸奥
ちのある 小て
て長ふて りもかい 浦やの
井一ちを二 て 波うまし
大名のて 記りる

南ア 未末
南ア 古道
イワキ 面白
里仲
、 東源
玉井
青陵
南ア 華山
春也

生涯を生き身のさんざめり　抱係
五月あるく猫もかるる哀れ　小園
ゆく柏て紙子こうすしせて　文弘（ムサシ）
ある風をたんて仕舞笠　為乙
涼初て来る風ひやめる　風帛
ひと松をゆく風の音　玉枝
吉風や実信とゆく鶴の猫　青丘
後面のひと鉢やゆるの風　仙牛
いつくゆく鶴集つまる春はを　玉蕪（ハセヲ）

ある風の涼まよ来れる井戸　三巴
来まる恋のうくたる社日　一楊
くのうすうすうる春の月　路郎
吸鉢の春を本涼ゆる　魯蕉
春のを紙鳶よりよりて　涼苔（米沢）
さいかいろうす春の月より　花又（ヒタチ）
藤えよつく坂もう春の月　こんめ
風呂桑よるかくる鶴の山れい　二丘（ニモカミ）
柏の男鉢まれまる鶴の鶴　性子

伊人を葛るとあり や弱夫 リウ 大陸
ぬ桜 梱て 行く 弱枝の 少しめ
鶯 ゆいてくや 弱あつき 田舎
神風と おもつ風あるはすい 梅宝
出代やあまるあるこの神 秋 ヒサ 桂茅女
るるやは出代乱毋の名残 こと
はるもるはくるや 梅の花 大水
ゑのうけ庵の 対まあ意 秋田 内風
山やはのけ 梅の 残り 之丸

杉山のえ切るあるさくら 米犬
山さるや門さく出れ 月海 ヒタチ
下るれのをかけるるるる 梅庭 ヒツタ
紅梅堂を雪よやうをて 茶部
秋えやえ雪まもじよ夕 新 ヒタチ
留るのれるけて 色らをの庵 第報 赤封
花も山もをくるゆるや 二日より スルカ 法山
傘の人 尚 あるくるる 武石
ちる花のあるみを 拾のく ミナノ 易足

ちるにさへ生も出けれ花の中　子輅
もとの田にかへぬ川原や古き里　吉之
松風や苔の花にも静なり　ヒタチ 蔵星
夕すゞみ船のきはやく苔の水　モカミ 雲山
月しづかさくや菊より見え菊　某雅
根も葉の香もあるや萩の花　祖筆
うぐひすや眠いまなこの夢の白　佐倉 坂生
山つばきちらりと紬あやしき袴　シカ 石上
あきをしや月ちやくと春の旅　梅守

新涼にていつまでまうのふの庵　辰子
生素にて夜の虫の音ぞ音出　久蔵
稲刈へ宮神を守り顔ぬれ　文鳳
ゆくとも米とても寿も来たれ　橘女
春寒も香かほりける花の宿　坂府 文扇
法下の結合きたなき門ふれ　五月
なつこともいひ引りとあてつ　麻史
世末国にて二葉にまたや奈良　モカミ 斗玉
草の葉に花の色をみんと月にて　坂府 宗種

かやくと　はの中ゝ　月を
青雲や　はるゝ　ぬるゝ
夕くれ　星ちらく　秋の行
松行み　ゆくゝ　秋やなの花
娘やう　丁のなく　表やたれ
う　接　ゆくゝ　以吉
筆目の　屋や　椿　表
ちめ　紙　あけ　表
さしう　戸を　押　月

上タチ　明眉
上ヨリ　秋水
　　蕎麦
　　松迫
　　孫晒
　　以吉
下ヨリ　表
　　こ
　　芦中

ちまの　一ウ　下ナ　梅望
うらいす　ゆ　ゆ　上タチ　葛良
いつ　や　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　白水
梅　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　松秀
川の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　以交
うめ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　筆生
蕎　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　椿海
あと　連の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　上タチ　十中
ま　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　下ナ　一ウ

稚芋の毋へ乳迄ちうちうなる　東成（ヒタナ）
ひるね乳ちうへうなる　形保可雄（トサ）
麦めしの稚のうるさきこゝの夢　孫哉（ヒタナ）
芋し紅見もいろ〳〵もれ花　花言
ちるや木の宮よ低紅い梅　もれ
出代や去すうこゝろ春の白　孫聚（トサ）
日に春のたらぬ出仕やゆるゝ　凡河
雪ふの雲も去除きもきりぬ　多俵
月よたゝや余宝のうちの稚ぶい　桂堂（ヒタナ）
、　去亜

夏の部

苔咲き見の出る四月の蛙　米法　貝谷
塗笠の上まで畳の四月小　聖扇
人並手も待れ有きて雪　谷村（トサ）
毋も向ばそまむや夜之　山笑（ヒタナ）
宝のうて夜文ゝとられ雨　广来（ハヒタナ）
けつまはく乗の入りやこゝろも之　江三（ヨリ）
山まちまち有もあり傳生会　柳吳（ヒタナ）

花ぞ咲てこりてこきあはゝ法
なくきれ蕎のたけ後を寒うら
郭公ほんてとゝ鳴 松杜鵑
附句 時の町の 酒たゝ
菓も菓子もあれてうこ時分
帆張あ向のきしやりこる
入おや 袖る 聖の法華経
抜ておく石のこてきこの実
るとけてれいこてるこ

一雨夕
ヤウ 夕べ
ヒタチ 素麺
ナレラ 一毛
ヨリ 祖父
上毛 一風
寄居
イワ 蒸鰹
一首

つ蕎を汁も蕎麦や家本立
下雪や 湯の ゝる井戸のこ
和の花よ ゝる 伏見のり 蜂
このこなやり 物けの ゝる
石蕎麦 植てき ゝ 茄子
尼達のお見て 法 ふゝきこ
塀ふ 畑のへ やけ の花
けこのこる 灯こ ゝ
風月やこ ゝ ゝ 落こ ちの花

ヨク 蕎麦
米沢 古蕎
ヒタチ 傘金
米沢 宮蕎
ヒタチ 眉蕎
下毛 こ蕎雄
南ア 大戒
、表紙
イワキ 芦月

蓮ちるやきくとみるあらしかな　ヒタチ　よし鳥

垣ごしの牡丹にのこる風情かな　ナラフ　鶯丸

あめの日は人にわするゝ牡丹かな　米沢　想雲

静かさや茶のふる日わらんべ　ムサシ　芳石

古寺ふくろ蛸のくゝり置にけり　下毛　凱山

名月や芒をよるほとゝぎす　南部　劉窩

酒ものこの宗井ぬけるまとに　、茶中

鶯や筆にもさする好きかな　ムツ　凮色

いつもかもあふし一杯の飴の味　李直

只見てはすむ月のよさ好き哉　平泉　石竜

すゝしさを立て好きのあれ　イワキ　こまめ

山ふかく来はつくやめ月雨　南部　一光

さゝれや早きあふせて床の哉　、喜蝶

縁先のまさゝれのり杉かな　エチコ　十雨

いまの魚油まつや梅雨の中　隆揃

藤はりくされも梅雨なし　ヒタチ　岩和

簟花はあきは秋之一つかな　耕雪女

樹蔭の鋼をさく秋い日かな　ヒタチ　大器

蔵の戸を開き夢を覚ます秋風
竹の子は成あるまゝにほとゝぎす
野老の花はいはぬ山あやめの
こゝろや秋の屋根にさゝやめ
お姫組地蔵行ふ京井筒
めり傘にかゝりや塩こを
帆の新の志よ戸ゝや風流
詩学もとゝゐぬ冷のうき宮
ものとらふ二ゝ丸まらもの

下カ 一南
ナシ 筆富
嘉来
エモ 廣太
ヒタチ 杉月
宋氏 木公
テハ 小仙
ヒタチ 巳楽
生安

病のあるに人のこゝ恋を尋ぬ
小屋原の雨ふる雨ふる
川野や豆の花の十ヶ一
河相のほゝきもゝ夏の月
まくさ紀茂の中やなつの月
見形より先一ゝ高ふる清水
宮州の豆畑下りや蛍の夢
文部や西ハ出るこゝの月
柱ゝて仲をこゝろと思ふ

紫函
友木
蓮子
楓下
ナシ 志文
宮海
浦山
一柱
蓮丸

遠の空やまさらの草の花　杜年

板の木は月ハ残てそまるのくひ　志仁

戸ぬりそこなてしてもみすぢ蓮　宗富

あきぬるまくやの梅ぞの白い弟　宗利

梅ぞのゝ月もさらに見るれば　急閑

あるとゝるとゝ塩のゆりゝ　庚白

傳ゝ考ゝもの嘆ふ古男　汀龍

秋の詩

みゆや情のむぶるゝ秋　寛海

雑詩おもしろ　おり伝

思ふの秋も　宿の秋　一夢

ゝ秋の日は　七月八日　保天

ゝ秋社　孤山や　相撲　素秀

山柚ゝ見ゝ　ゝ出会ゝ　日人

屋舎やてをるとてもて京師
おのもの山もかすみたりい
るまれるの柱をもて不早
さるなみ月も入りあるの川
松もうつ書て多りてのの川
ものはふやぶ浦てての川
伯父伯母のもんさやもの
おもうまてはうく科をたうあふ
ばけあるの知りさんあふ

一の宮　砺山
正保　芦原
大梅
林曹
南アル　乗之
モカミ　如旭
一具
越中　園風

玉水　松もう上はたうあ
あるの一枝ある時知り
宮の戸や板屋もたうさんむ
たうの松や篠も色るもあつく
ふ秋もんよ立てめてうく墓条
越中　柿南
と秋のとうとうとうの月
うとうとうあるまる
ふ見えの孫ふとうとう
ゆよりう戸ゆうもんも初あ

一清　白圭
柿牧
モカミ　赤風
越中　柿南
ヲク　一之
京池
ミヤ　吉富

と言て戸口にふく秋の風　ゆき山（ニヤノ）

秋風にふつて松の葉の落る　英里（ナニフ）

琴事の中よりとりて秋の風　義荊（金陵）

秋風やうゝ枯れ志ら毛ゆ之　高弘（ヨリ信）

鶴めしのふくて出て秋の風　福栄（大坂）

人々ひとり出て秋の風　桂丸

ふさとも附まゐる秋の風　菊毋（ヨリ）

月隠のさくロよりふきもれる　栢哉（伊タイ）

木枯はあらし出て秋の風　義之

秋の夜や四の柱を松のこゑ　斗石（ヒタチ）

帆の底をまとうもむすけり　秋吉（紀州）

秋の暮る中よりふるもむすけり　斗延

夜掃うゝ落ます木樵の音　告子

秋うゝ夜ゝ夜ゝ花の中ゝ　菊風

清ゝ夜ゝ秋ゝ月ゝ　財亮（大坂）

秋ゝ夜ゝ一ゝ伊ゝ世ゝ月ゝ　鼎龍（ヒ深）

さゝ夜ゝ人ゝ　五外

さゝ夜ゝ秋ゝ　一海

如月の夕ゆふ月夜ほのぐらく　うつく
霞のこまの花の陰のもとに　白雪
男へ〜あれこそ　一枝
ものもとこそあり　蕪村
宮ゆきしてはるの　桜の枝
ふるのたてもつのたもあるいなかの　一友
傘の雪より　一枝
雪も花も少の　桂樹
ひさうあるの宮　春園
桜やり樹下を女　一聚

[illegible]さ[illegible]行年て　稲波
鶯神のさらく　東條
[illegible]れ[illegible]のり松よ[illegible]さ[illegible]の花　寿月
藤咲く[illegible]る　藤の[illegible]さ[illegible]　遠気
月の[illegible]ひとなる[illegible]の藤　蕪外
小[illegible]入の[illegible]る藤[illegible]　[illegible]
一[illegible]藤[illegible]の[illegible]　西塵
[illegible]枯[illegible]の[illegible]　西塵
[illegible]枯やたひ[illegible]ぬ[illegible]　酒好

実こぼれの墓よりはえ出る男郎花　柔仮　友之

葉ゝ中の田ゝ人おとなみ笑よりも

寂てきゝやあの高ゝよりの青　ヒタチ　杉子

二百十日ふるのゝ雨めゝよりも　三十八　四合

八重や麦穂のゝ花まさる　夏伝毎町　一雄

八重の紫色よりのまゝ桔梗哉　エチコ　芝葉

十六夜よりたゝ小牛のうこ哉　南ア　貝子

名りやうつもゝ人の稲牛　岩キ　月雪

月ゝれゝまゝ人ある玉城哉　下ヤ　吉池

月のゝれぬゝもの月待おくり　ヒチ　積翠

后の月こゝらバ屋根もさゝ青　トサ　淦子

外かやよおゝゝ人ゝ十三夜　　吉雄

桑先ゝ新角ゝ　ヒタチ　只男

草牧や母のゝ人ゝ　柔仮　龍雪

水月ゝ人ゝ色よ飢ゝゝの色　モカミ　稲舟

芦笛ゝ秋おゝ人ゝ　　一雅

焼明てたゝこゝ人ゝ少ゝ　ヒタチ　路三

虫のゝ人ゝたゝ人ゝ秋明ゝ　　春江

三日月孤光うすなむ西の空　桑伝寺　机月

切さま短冊よりも西の方　仙台　由玉

秋の風くふさくなるぬまのむ　東伝寺　蜂洋

村雨のかけるたるけやきくれ　ヒタチ　冷泉

ふきくや秋寒きゆく秋なけ　思文

むつくあと秋てゆくまくのむ　イセ　有吾

一おりあるり秋や寒の花　武尾　月下

傘のあるを後やもあるや初雪　日向　双鳥

ふるくの石ふるくの苔ひろ　古陸

さ信ふ秋さてふ紀秋の　宋沢　古橋

秋林やもいる行ある夜ふし

萩信やもしもしもふ夜

南部秋野野の秋の山も

毛見おなるつ見やの空の秋　宋沢　二子

山川の風ふ夜ふむきあふ　ヒタチ　東止

よきけい秋の蓑て秋の声　エチゴ　鼎湖

川秋のふや入江秋の後　モカミ　稲邨

冬の部

畑もみな刈りあらしやみぬ月　文屋（下サ）

千鳥なく磯ふるさとの小夜ふけぬ　由之

神垣の花活てゐる榊をも　泳路

一もとの人をさそふ十松庵　且二

うれもしく此春の内は菓の花　文里（工キコ）

神無月下戸の酒の高砂の　芭蕉（シク）

十月の沖より通る小舟の帆　高半（上モ）

まゝのうるむらけの赤や初時雨　五松（ホヤ）

うゝ人を寄よ初しぐれ　柳園（ヒカヲ）

時てうゝ雨うはけるの老い傘　休秋（正保）

雨の雲ゝ雨ゝ降る時雨　南山

紅葉よりうゝ雨きのしぐれ　二本松人（ニホマツ）

おもゝまを撫ふてうゝ雨ゝ　伯麗

音信乃無て沼は有る雨ゝ　石帖（米沢）

こがらゝや角ゝ雨ゝ書のうゝ　美成（ナレフ）

雨佐や雨ゝ降りの月板　慈赤（米沢）

拾ふ習ふ嵯峨 時雨もあれ　梅雪（下サ）
雪踏の跡 あかりや淀 兎　嵯峨紙（ヒメチ）
罠うけて鹿ぐるまたはけや素はら　炭俵（岩キ）
表より入て裏へ抜るぬ鞠と汁　英山
海苔とをあのもとに宮ぬ形　南畝（ヲク）
夫人はきものこそあるもきれ　呂仙（仙タイ）
孫表の笑いゆゑ　槽あうり　芋丸（上毛）
鉢孔やこの一竈も年貢炭　方丈（ヒタチ）
岸うつる社頭きしき小紙屋　乙村

炭のおこり　素行
元岸年出次の笑ひやさうう　大坂　杉陳
二信ともひとやこの炭　風也
一月ほど独て枯りぬ芽　野秀
邦垣や芦ともれる枯て　呉聚（エチコ）
夕梅やはまやる泉の向キ　三笠（ムサシ）
夕伝やとしもまま垣枯　丙墨
永庭ほのぬ独なきこと　陸風
鞴ともの夕油のこと　素民（ヒタチ）

雪降やうゆる雪の中　第伝 夫二
降雪やいさゝか雪やけはてし　ヒタチ 高蕉
ふるはれは威勢ある金蘭
降雪の中と樣まる冬枯森　南ア 冨祐
雪の中来て出雲てゝ書えん
雪れのゝかゝ　玉保 落雪
市中や雪は遠いる人通り　不三
冬の百姓二家ある郡　市伝 青子
ちゝゝ竹のさゝ門の雪　南ア 茅舎

百姓て牛様ある　玉保 尚古
塩こてゝ海鼠ある乳中森　ヒタチ 一百姓
色あゝ小ゝ金ゝ冬の雪　下サ 市石
抵抗ゝて ふむや森の足のあ　ヒタチ 松恋
下駄のおゝ後ゝ　ヒタチ 望栄
炉栄て金性の仕掛かゝ
たまさゝ冬の通ゝや松尾芭　ヒタチ 芭蕉
ゝゝ汁の世ゝ来ゝ　ヒタチ 望栄
かゝもなゝむゝ到俳の会伝　蕉浦

おもしろう湯のくもあり海さお　トナ　百まめ
ちり芥多紀はなその通ひ事　新蕗
燒掃やり燒捨ま人の中　きしき　次蜂
まさをにも梅の花さくて事い　ナンフ　升五
掃掃て寄る松ら事紀度ろい　甲斐　棠梨
ゑ造化を神扱ひやま掃　匹蘭花
年ま陽ま来て乗ひさろい　ころみ
年の市雲の降こむ下時やい　ヒタチ　杉月
中ろとして病りろの市　紙年

いとう鉄いてもあり小田の杉　キ山
あるものて鉄をかろう年の雪　岩キ　夕山
あつ風ろ紙ろ紙ろ山ま紙雪　紙中　鶯茶
枯ろのと雪てろ山　花　イヨ　月蘇
しろろや花とあ紙の雪ひ　東ア　梅盧
やよ鉄ろの山ろ湯て夜　会は　梅渓
はふろ雪て夜ま山ま紙雪　、文和
夕雪や いろきん のろさい　、乙表
松ろ雪の中ろろ雪なれ　紙は　花来

あぢ向て横の耳かゝ義ゝ、　季眠

追加

菜ゝ夫のあるぬ望しなく性　越後　永照
負ふさまゝ智恵の行方梅の花　、　芭雪
日の傍や昨あちこと花芽　、　郁南
さぶしやゝて歩り山の祇　、　松人
大木ゝ淋ゝあり〻ゝ雨　、　竹人
花ゝふて家ゝまての乳ゝ　、　山幸

梶竹ゝ川あゝゝやゝゝの花　ムカシ　平清女
一概ゝ匹ゝ濃るゝ花　、　厂象
日のあゝ方ゝゝ花　下ナ　文度
田の秋を明ゝゝゝ夜の花　上ヲチ　古川
ゝ明やゝ花ゝ花の明ゝゝ　城后　東帝
義線ゝさゝ丹を一角田川　ムサシ　美吉
皂角ゝ矢ひゝゝ夫ゝ　米沢　乙矢
庭ゝやゝゝ家ゝ新や新ゝ　上モ　嵩丸
家桜好盃の度ゝゝあゝゝ

まふてはやしたてゝ
九雌（コリ）
なるべき
てゝ
ムカシ
作木
ラク
ゆ
ムカシ
古瓶
山厚
ゆ幸
南二

梅さくや
耕雨（ヨ変）
うゝ
尚富
永日や
玉之
日出
紫夕
千代
三也
葉さん
お好
乙子や
杜五
春さき
徳而
永日の
桂別

摺こゝすまさく柳のまゆひいら　、　、　信義
こ井ちの清こゝもきらゝ哉ら　九蓮子
竹家なる墻の中ゝうゝこの花　亀稈
まのゆゝ山をしてゝてをゝ　安外

落縁ゝ横(ヒテ)れたゝゝや雑糸　一具
ゝゝかゝつゝしゝる杉杞笹　沙上
ちゝゝゝゝ雀　鶯ゝ二月下　田華

俳ゝゝゝおく安城の街　八重め
きのゝ助なゝ文祐　芳之
ゝつゝゝゝる態稈の花　子軒
ゝゝ菁は塚はまゝる初あし　梅宇
入地し街ゝゝ月を宮　一具
杉角ときゝゝさゝ角ゝゝ　沙上
凡の雷ゝも悲の中ゝ　田華
蘭念仏の月ゝゝゝゝ　八重め
数又ゝゝて永のゝゝや　芳之

外今見る所を略す

いとこの風の梅の月きい
月の雪を人を楽らいい
白法をもあらひとも
むの法度腐し味噌とかぶ
引こもの赤い野のもつく
ふもの菜稚生供を拿さく
ふ去てしまう雑式の書
意や角をもらう八郎重きく

子孫
梅宇
一具
汐上
田華
八重
苦之
子孫
梅宇

酒米をもく宵戸の張り
けこもの料理生さく茶の
仲義こもれ風の仏
病人しりもの一日きんよう
ナのいく入まる長屋
本石をつれと移ふもの書
きの九猿のしれを
猿先を示なやもし祝生寺
今度の法を九を治その

一具
汐上
田華
八重
苦之
子孫
梅宇
一具
汐上

いつ来てもさらさら雪ふる　田華

芦やぶのうら回のしらく　八ゑめ

名のつゐた山廣君花よなり　芝之

桜　鍼をぬつてをいらよん　子輪

四賀爺をれハなきるかるる　梅宇

ほ形の池ゑる音　業　挑華

一秋ゑる日窓ゑ[illegible]

傳のゑをみるゑ[illegible]

物ゑゑ地の保ゑ[illegible]

ゑ[illegible]ゑと老[illegible]

庭ゑ[illegible]

[illegible]集め[illegible]

[illegible]門生[illegible]

かちの世界に居る人の心を慰ん
為に茶を点ん為に松葉の
みどり絶常の緑みたること
数歩を移さるみうけし芳
和漢の人も皆もとめ来る
人のこゝろ絶えより先に
おもむくる所に師匠
うきよのよろ庵日毎に
味ひ古き中古を探るこゝろ
うきよをふみ歌をたしなみ
所を絶所常を概ね居乃面
ひ所を僅半しまた城中の
雑乃面のうきよ慶長とも
ゆ迄ほうきよ好の黒のもとは乃詩

算の[illegible]小冊
子[illegible]や戸
[illegible]此趣を述て筆
[illegible]
天保三年[illegible]春二月
函[illegible] [illegible]書

[竹澤]

一具庵蔵版

賣弘所
東都日本橋四日市
桂林堂 上總屋利兵衛
同 通四丁目
金花堂 須原屋佐助